

鄭氏と根拠地沭上(タインホア省ヴィンフック県)についてのいくつかの考察

ホアン・ハイ Hoàng Hải (大佐：政治総局政治局)

翻訳：蓮田隆志

0 翻訳にあたって

この論文は原題を“*Máy suy nghĩ nhà Trịnh và căn cứ địa Biện Thượng, Vĩnh Phúc, Thanh Hóa (biên tập).*”といい、*Ban nghiên cứu và biên soạn lịch sử Thanh Hóa Chúa Trịnh vị trí và vai trò lịch sử: Kỳ yếu hội thảo khoa học.* (タインホア歴史研究・編集班(編)『鄭氏、その歴史上の位置と役割：学術討論会紀要』 Thanh Hóa: n.p. 1995, tr. 276-287.に収録されている。

成立当初の後期黎朝が根拠地としたタインホア山間部の歴史地理について軍事的観点から考察したもので、同様な研究は少なく貴重な業績である。さらに、現地住民からの聞き取りなども交えて地元の小地名も含んだミクロな考察を行っており、我々外国人にはなかなか取り組むのが難しい作業がなされている点もこの論文の価値を高めていると言えよう。著者のホアン・ハイ氏については、人民軍政治総局政治局大佐という論文執筆当時の肩書き以上の情報は得られていない。

翻訳にあたっては逐語訳ではなく読みやすさを優先している。史料の引用については、著者はベトナム語訳を使っているようだがその書誌情報が示されず、引用したページ番号のみが記されている。これでは日本の研究者にはあまり意味がないため、巻・ページ番号は省略に従い、代わりに原文を付記した。ただし、ベトナム語訳本が依拠した底本にあつて、訳者所有の原史料に見あたらない章句がある。地名の表記は、現代地名はカタカナ表記、歴史的文脈における地名は漢字表記、いずれも初出時にクオックグー表記を付記する形を基本とする。両者が混然としている場合は、初出にて3つの表記を全て並記する。過去の漢字地名であっても手持ちの史料から漢字・チュノム表記が復元できない場合は、カタカナ・クオックグー表記のみとする。下線部は原文ではイタリック体で強調されている部分だが、ベトナム語と日本語の語順の違いのために完全に原文通りというわけにはいかない。原注は脚注とし、訳注は後注とした。

I タインホアのヴィンフックの沭上の地名

歴史地理および省・県・府・社・むら(ランlàng)の呼称は、各時代・各社会制度を通じて常に変化して異なっている。ゆえに黎鄭時代の沭上(ビエントゥオンBiện Thượng)の地名を正確に確定することはとても困難である。

『欽定越史通鑑綱目』(以下『綱目』)に「鄭検はヴィンフックVĩnh Phúc県ソクソンSóc Sơnの人(正編 卷 27、3b 註鄭検：鄭検永福槩山人。)」とあり、甲寅(順平)六年(1554、莫朝光宝元年、明朝嘉靖 33 年)には「太師の鄭検は沭上に移って駐屯した。(正編 卷 28、4a：太師鄭検移屯沭上)」とある。同じく卷 27¹には「沭上は清花省紹化府永禄県huyện Vĩnh Lộc, phủ Thiệu Hóa, tỉnh Thanh Hóaに属する社の名前である。(正編 卷 28、4ab註沭上：社名。

屬清花紹化府永祿縣ⁱⁱ」)とある。潘輝注の『歴朝憲章類誌』には「鄭検はヴィンフック県ソクソン社の人で、汴上の土地 (đất Biện Thượng)に寓居した。(巻6、人物誌 帝王之統 附鄭世祖明康大王：姓鄭、諱檢。永福槩山人、屋汴上郷。)」とある。

八月革命以前、地元の人々はソクソンむら làng Sóc Sơn、ボントゥオンむら làng Bông Thượngと通常は呼んでおり、2つの村は境目を定めがたいほど隣接している。このとき、ボン總 Tổng Bôngⁱⁱⁱはボントゥオン Bông Thượng、ボンチュン Bông Trung、ボンハ Bông Hạの3つの Bôngを含んでいた。八月革命後、ボントゥオンむらはソクソンむら、ロンむら làng Lon (ヴィエトイエン Việt Yênとも呼んだ)、ダーブットむら làng Đa Bútとともに7ソム xóm (トン thônとも呼んだ)から成るヴィンフン社 xã Vĩnh Hùngを構成し、のちにタックタイン県 huyện Thạch Thànhのドンムックむら làng Đồng Mục (ムオン族の村である)が編入された。

そのようなわけで、もし汴上が社名であるならば、汴上 Biện Thượngは現在のボントゥオン Bông Thượngである (かつての Biện ビエンは現在は Bông ボンということになる)。

もし汴上がかつての国家が規定した特定の地方 (たとえば總)を指す名称ならば、地理的範囲はより広く、地分はマー川 (馬江、sông Mã) 北岸にあって中心はボントゥオンむら (現在のヴィンフン社) だっただろう。東南はマー川に沿ってボンチュンとボンハつまりかつてのボン總、さらに下ってクン市場 chợ Cung (ヴィンミン社 xã Vĩnh Minh) に到る。というのも『綱目』q.27, trang15に「オンクン市場 chợ Ông Cungは今のオン市場 chợ Ôngで汴上社にある。(正編 卷 27 6b 註翁龔市：今翁市。在汴上社。均屬廣化府永祿縣)」と注釈があるからで、汴上の西北はおそらくタックタイン県 (石城縣) のヴァンルン Vân Lung 全域を含んだと思われる^{iv}。

まとめると、時代によって地理的行政範囲は変わるものの、汴上の中心は現ヴィンフン社のボントゥオンで、そこには鄭府 phủ Trịnh、ゲーヴェット nghề Vệt^vがあり、近くのソクソンやヴィンタン社 xã Vĩnh Tânのダーブットには鄭氏の子孫の墓が多く発見されている。

II 戦略上の要地汴上

1. 汴上の位置

汴上はマー川北岸、ソクソン川 (槩山江、sông Sóc Sơn) が南流してマー川に合流する地点にあり、マー川の対岸は紹化 (府) phủ Thiệu Hóa の安定県 huyện Yên Định である。東は河中県 huyện Hà Trung と接し、西は永祿県ヴィンホア社 x. Vĩnh Hòa のザンドン Giang Đông と接し、背後の北方はタックタイン県と接し山と森が広がっている。

マー川の流れは曲がりくねっており多くの滝がある。川の両岸は堤防道である。堤防は多くの場所で岩山に接しており、堤防内には民居が密集して川沿いの村落を形成している。汴上から流れを溯るとヴィンホア社 x. Vĩnh Hòa のロイチャップむら làng Lợi Cháp で2つに分かれる。1つはキェウの渡し phà Kiêu を経てトブック Thọ Vực、フークアン Phủ Quảng、

【原注】

ⁱ Vân Lung は Vân Lũng とも言い、かつては永祿縣と同じく紹化府に属していた石城縣に属した。他方、『大南一統志』(巻17、清化省下、人物)に「黄廷愛は永祿県汴上の人である。」「綱目」に「黄廷愛はタックタイン県ヴァンルン Vân Lũng の人か? (巻28 14a 註黄廷愛：黄廷愛、石城雲隴人。)」とある。よってかつての Vân Lũng (雲隴) は汴上の地分に属していたのだろう。

ヴィンロックのタイドーTây Đô (西都) に到る。もう一つの支流はコンの渡し **phà Công** (フンコン山、奉公山 **núi Phụng Công**) を越えて東北方に折れコーテーの渡し **phà Cổ Tế** を過ぎてタックティン県のキムタン **Kim Tân** に到る。沭上からマー川に沿って下ると市場とボンの三叉路 **Ngã Ba Bông** で2つに分かれる。北方の支流はハーチュン県 **h. Hà Trung** を流れてドーレン橋 **cầu Đò Lèn** で国道一号線を横切り、ホウロック **Hậu Lộc** ・ ガーソン **Nga Sơn** を経て海に到る。南側の支流はチュアザー市場 **chợ Chùa Gia** でチュー川 (梁江、**sông Chu**) に合流し、ホアンホア (弘化 **Hoàng Hóa**) ・ ドンソン (東山 **Đông Sơn**) の地分を流れて国道一号線の近くで再び分流する。1つはタオスエン橋 **cầu Tào Xuyên** で国道一号線をくぐってホアンホア県の中を流れて海に出る。もう一つの支流はハムロン橋 **cầu Hàm Rồng** で国道一号線を越えてホアンホア県とクアンスオン県 (廣昌 **Quảng Xương**) の境を流れて海に出る。(地図参照)

『類誌』に「以後、安場は王府の宮廟として宜京 **Nghi Kinh** と称され、200年あまり沭上・槩山とともに重要な場所となった (巻2、輿地誌、諸道風土之別、清華：迨後、爲王府宮廟號稱宣^マ京、二百餘年與沭上・槩山並重地。)」とある。

つまり、沭上は様々な面で重要な場所なのだが、ここでは軍事面からのみいくつか考えておきたい。

2. 西都の確固たる前哨にして遠方からの (攻撃に対する) 機動的防御の最前線としての沭上：鄭莫戦争における鄭氏の頑強な根拠地

莫氏が黎朝を篡奪し、阮氏 (阮淦) 次いで鄭氏はタインホアに逃げ込まざるを得ず、「扶黎滅莫」の旗印を掲げて「南朝」を建てた。北朝 (莫朝) と南朝は並び立つことができないため、莫朝は不俱戴天の宿敵を殲滅しなければならなかった。そのため、鄭莫戦争は熾烈なものとなり、莫朝はタインホアを征して西都を奪い南朝を滅ぼそうと決心した。西都に攻め込もうとすれば道は2つしかない：水路と陸路である。

西都への主要な水路はマー川である。各海口・河口から西都へは50~60キロ川を溯らねばならない。仮に国道1Aつまりハムロン橋もしくはドーレン橋からマー川を溯ると計算した場合、ハムロン川は途中でチュー川、コウチャイ川 **sông Cầu Chày** と合流し、ボンの三叉路でドーレン川と合流する²。ここからクン市場に上り、ビエントウオン・ソクソンを経てザンドンへ上り、(マー川のうち) ヒューチャップ川 **sông Hữu Chấp**³ と呼ばれている部分で2つの支流に分かれる：ひとつはキエウの渡しを過ぎてトヴック **Thọ Vực** に上り、ヴィンロック町 **thị trấn Vĩnh Lộc** を過ぎて西都に到る。もうひとつはコンの渡しまで行ってコーテーの渡し (ブオイ川 **sông Bưởi**) の方に折れてタックティン県のキムタンに到る。コンの渡しからはフンコン山 **núi Phụng Công** を經由して西都まで陸路で6~7キロである。

この河川ルートは曲がりくねっており、中流から上流へと遡るにつれて多くの滝がある。敵軍 (寄せ手) は流れに逆らって行かねばならぬ故に行けば行くほど困難と危険が増す。川の両岸はどうかと言えば、鄭氏軍が伏兵を置くのに絶好の險阻な山地である。

² キムソン山 **núi Kim Sơn** のところである。キムソンはビエンリン **Biện Lĩnh** あるいはボンソン **Bồng Sơn** とも呼ばれる。

³ ヒューチャップ川はヴィンロック県ヴィンホア社ライチャップむら **làng Lai Chấp** にある。

タインホア南部各地からの陸路は紹化府内のズントン町Rừng Thôngを北上してヴァンの渡しでチュー川を越え、コウチャイ川sông Cầu Chàyをシー橋cầu Siで超えてクアンラオ町Quán Làoの三叉路に至る。右に道を取れば5kmでイエンホアインの船着き場bến dò Yên Hoà⁴で、ここでマー川を渡れば沫上である。三叉路を直進する場合はキエウ（の渡し）を経由してヴィンロック、西都へと至る。

ダンゴアイ Đàng Ngoài から莫軍が陸路で攻め込むにはニンビン Ninh Bình～ニョクアン Nho Quan～ジア Rịa～フォーカット Phố Cát～タックタイン県のキムタンというルートが当時は唯一のルートだった。キムタンから左手に道を取れば山林を突っ切って沫上へ下る近道となる。道は坂や峠、滝壺だらけで道に迷いやすい。地元の間人だけが猛獣を避けられるルートを知り伏兵を置く場所を把握している。キムタンからそのまま右手のルートを取れば、コーテーの渡しでブオイ川を渡り、ヴィンロック県に入って右に曲がれば西都に着く。

というわけで、水路も陸路も敵軍が沫上に達するのは困難なのである。沫上に入れなければ西都に入るのは難しい。逆に敵軍が沫上を経由せずに西都に入ろうとしたり、あるいは実際に西都に入城したとしても、鄭氏軍は有利な前線基地である沫上から素早く機動的に援軍を派遣してあらゆる方向から打撃を与えたり、伏兵で退路を断つことができる。沫上から近道でキムタンに出るにはわずか10km強で、ハーチュンのタインサーThanh Xáへ下って国道1号線に出るにも18kmしかなく、川を渡ってクアンラオ⁵へは5kmの近さだ。素早く、秘密裏に、陽動の兵を出して、敵が至るときでも退くときでも敵のいるあらゆる分かれ道で敵を分断したり道を塞いだりして混乱に陥れて逃げ道をなくすことができる。守勢のときはこうだが、北方に攻勢に出る場合は、沫上から水路の場合は流れを下ればよく、陸路の場合はキムタンへの近道を通りフォーカットからニンビンのチュオンイエン (Trương Yên, 長安府) に出れば、国道1号線経由の半分ほどしかかからない^{vi}。

叙上のことは戦史が証明してくれている。莫朝が黎朝を篡奪した1527年から鄭氏が(莫朝を)打ち破った1592年までの約60年間、国中で熾烈な戦闘が幾度となく繰り返されたのは周知のことである。タインホアに限ってみても大きな戦闘は20度を超えるが、莫軍がタインホアに攻め込むケースがほとんどである。莫軍は水陸からマー川を遡って沫上～ヴィンフック～西都へと進んで鄭氏を滅ぼしてタインホアを制圧しようとした。

当時、道路交通の手段は未だ発達しておらず、莫軍の最大の長所は水軍を使って速やかに軍隊を遠くに送り込むことで、兵士を養い、多くの軍隊・糧食・武器を蓄えることが可能だったのでタインホアに攻め込むことができた。莫軍は通常は大きな軍艦の艦隊で海口・河口に突入して上陸し、水陸協同して鄭氏軍を打ち破ろうとした。それぞれの戦いに見られる河口・海口・河川その他の地名は異同があるが、ほとんどはマー川沿いのものである。

マー川の険阻な地勢に恃んで、沫上の根拠地と鄭氏軍は莫軍を全て打ち破り、多くの有名な戦いで勝利を得た。例えば、乙卯年(1555)8月^{vii}に莫敬典が軍を率いてタインホア

⁴ イエンディン県ディンタン社 xã Định Tân, huyện Yên Định にある。ドーホアイン Đò Hoà とも呼ぶ。

⁵ かつてのイエンディン県 huyện Yên Định、現在のティエウイエン県 huyện Thiệu Yên に属する。

に入り、進んで神符海口 cửa biển Thần Phùに駐屯し、さらに軍を進めて大頼江 Đại Lai giang⁶にて合流し、壽郡公を使わして金山に駐屯させた⁷。

鄭検は將兵を集めて策を練った。川沿いの住民に慌て騒がぬよう指示した上で、武將達に各々兵を率いて安定山 núi Yên Địnhから軍安山 núi Quân Anに至る川の南岸に兵を伏せさせ、鄭検自身は大軍を率いて白石山 núi Bạch Thạch⁸から金山 núi Kim Sơnまでの川の北岸に兵を伏せた。さらに 50 匹thótの戦象 voi trậnを金山の麓に伏せておいた。

広郡公范篤 Quận Quảng, Phạm Đốcは10 隻強の水軍を率いて有執江 Đông Hữu Chápから金盃川 sông Kim Bôiまでの上流部にあつて援軍として控えた⁹。

後日、賊軍（莫軍）の軍船が翁龔市までやってきたが、軍安山に達する前に兩岸から砲声が轟き、雨霰の如く砲弾を降らせた。鄭検は軍を出撃させ、下流の象部隊は川を渡って後方を攻撃した。范篤の水軍も同時に流れに沿って川を下って攻撃した。軍隊と象部隊とは兩岸から協力して挟撃した。

水陸の賊軍は戦わずして自壊し、賊將壽郡公は捕えられた。賊の水に落ちる者は、死体が川を塞ぐほどで、戦利品の武器は数え切れないほどだった。数万の賊軍は殆ど死んでしまった。莫敬典は敗残兵を收容して逃げ帰った。

丁巳年（1557）7月、莫敬典は再びタインホアを征服しようと軍を率いて神符海口および宋山（県） Tống Sơnと峩山（県） Nga Sơn（いずれも河中府 phủ Hà Trung）に侵入してきた^{viii}。鄭氏の武將は峩山を守り、瑞郡公河壽祥 Quận Thụy Hà Thọ Tườngは宋山を守って莫軍を防いだが、莫軍はこれを抜けなかった。鄭検は兵と戦象とを率いてひそかに安謨山脚地区に到った¹⁰。そのまま海口まで突き抜けて敵軍の背後を襲い、上流と下流とから挟撃した。武陵侯范徳琦^{ix}は船を突撃させて傘持ち^xを斬って川に叩き落とした。莫敬典はひっくり返って水に落ちて隠れ逃げた。莫軍は大敗し、船を捨てて山林に逃げ込んだ。莫敬典は山中の洞穴に三日間隠れて、バナナの木を抱いて泳いで川を溯り、ようやく漁師に助けられた。

鄭氏軍は全ての戦いで無敗だったわけではなく、ナムディンの膠水 Giao Thủyでの戦いの様にタインホアの外での戦いで敗北することもあったが、それでも莫軍がタインホアに攻め込んできた時には莫軍は尽く惨敗した。逆に、1570年に鄭検が死んだ直後、鄭検の息子である鄭檜・鄭松兄弟が相争い、將士は和せず人民が動揺し、鄭氏側が敗北の危機に立たされた時ですら、鄭氏は勝利を収めた。（兄弟の内訌という）状況を利用して莫氏側は10万の兵に700艘の軍船を仕立てた。多くの人々が殺され、煙火立ちこめ、軍旗が日を蔽う光景は、鄭檜に敵することができないと思わせ配下の頼世美・阮師尹・王珍・武師鑠などを率いて莫氏に降伏させるほどで、汴營（すなわち汴上）は失守し緊急事態となった。莫敬典

⁶ 大頼川 sông Đại Lai はレン川 sông Lèn とも言う。

⁷ いずれもマー川あるいはその兩岸の諸県に属し、ボンの三叉路 Ngã Ba Bòng よりも上流にある。[訳注：「下流」の誤りと思われる]

⁸ 安定山・軍安山・白石山はいずれもマー川沿いの諸県に属す。

⁹ 金盃川はマー川のうち、ヴィンハオ社ザンドン Giang Đông, xã Vĩnh Hòa の部分を指す。

¹⁰ 「ひそかに安謨山脚地区に到る Lén kéo đến mạn Sơn Cước Yên Mô」とは単に汴上から近道でキムタン〜フォーカットへと進んだことを指すだけである。安謨（県）は峩山（県）と海側で接している。

は（進軍命令の）太鼓をひとたび鳴らせば鄭氏軍の城を降すことができると考えたが、最終的には（鄭氏側は）負けを勝ちに、危を安に転じた。¹¹

叙上の諸戦闘は、汴上が攻防いずれにおいても軍事上極めて有利な場所であることをまます証明してくれている。

山林険阻な地形とマー川の要所という地勢とが、幾段もの堅固な縦深防御を作り出し、敵の侵入を極めて困難にしている（川の流れに逆らって滝壺を渡るか、深い森を突破して峠を越えるかしなければならぬ）。だが、鄭氏軍が反攻・進攻するには極めて有利なのである（流れに沿って川を下り、素早い移動が可能で、地勢に通じているなど）。

このような有利な諸条件に依拠して鄭氏は汴上を防衛し、西都を防衛し、タインホアを防衛することが可能となり、この地（タインホア）を莫朝を打ち破って黎朝皇帝をお守りして東京に還幸させる基地とし得た。

別の面、軍事経済的潜在力に就いてみれば、戦争の被害は大きかったが、他の地域と比較した場合、汴上はその立地という利点があった。汴上の正面、マー川から南にはタイン村の穀倉である紹化府安定県から農貢県 huyện Nông Công に到る広大な水田地帯が広がっている。北・西北方面は豊かな林産資源と牛・水牛の畜産が発展している森林地帯である。汴上は山地と平野との境界に位置している。山地にはマー川とチュー川というタインホアの2大河川が西北から流れてタインホアの中心部を貫流し、多くの支流に分かれて海に達している。そのため「ダンジョン」「ダンゴアイ」どちらも連絡が取りやすい。船舶は河川を上り下りしてにぎやかに商売をしている。花売りの船や筏のかけ声は川の上から絶えることはなく、客船はあちこちから汴上やってきて、オンクン市やズン市 *bến chợ Rồng*、ホアイン *bến dò Hoàn*、フンコン *bến dò Phụng Công* といった船着き場に入った¹²。

西都から海に出る水路は発展しており、川の兩岸の住民の数は多く、それが兵糧の運送を助け、省内各地との商品流通においても、鄭氏軍根拠地との往来は容易だった。鄭氏は民に依っていたが、的が攻めてきた時には川沿い諸県の住民に清野計をなすように定めた。各海門と道路には砲を置き、賊を見たら発砲して伝え、開戦の合図とした¹³。

これによって鄭氏の軍隊の経済的基礎及び補給は担保された。汴上は名将黄廷愛、郡公黄廷逢、提統御營鄭桃、少保鄭永紹といった多くの有能な将軍を送り出した場所の1つでもある。

かくして、タインホア省内の他の場所とともに、ヴィンフックの汴上は鄭氏に対して半世紀以上に渡る長く熾烈な内戦において莫氏を打ち破るのに重要な貢献を果たす確固たる根拠地となったのである。

III 結語

実際のところ、戦争の客観的且つ峻厳なるルールは「強者は勝ち弱者は敗れる」である。根拠地は勝利を決定づける力をもたらす大切な要素の一つである。根拠地を見つけること

¹¹ 黎貴惇『大越通史』および『綱目』から引用。

¹² ヴィンロック県のフォーモイ *phố Mới*（フォーザン *phố Dáng* とも言う）、ヴィンロック県のフォーボン *phố Bông* (*Biên Thượng* 汴上)、ドンソン県 huyện Đông Sơn のズントン *Rừng Thông* は、抗仏戦争期のタインホアの後背地において繁栄していたことで有名である。

¹³ 『綱目』巻29、丁丑五年（1577）秋八月条。

は難しく、根拠地を確定することはより困難である。というのは、根拠地とは単に陰阻な地形であればよいというものではなく、各歴史段階における戦争や勢力育成のための要求に応える諸要求・諸条件を満たさねばならないからである。黎利ははじめ山林陰阻な藍山を根拠地として蜂起したが、時には

靈山に居た時には食料が数週間も底を尽き、
瑰県では軍勢は一部隊にも満たなかった。^{xi}

起義が発展したのち、藍山の義軍はひとまずタインホア山地部の根拠地を離れてゲアンに進攻し、「(ゲアンは) 地理的に要衝で、土地は広く、人口も多い¹⁴」という阮隻の献策に従って新しい根拠地を建設した。

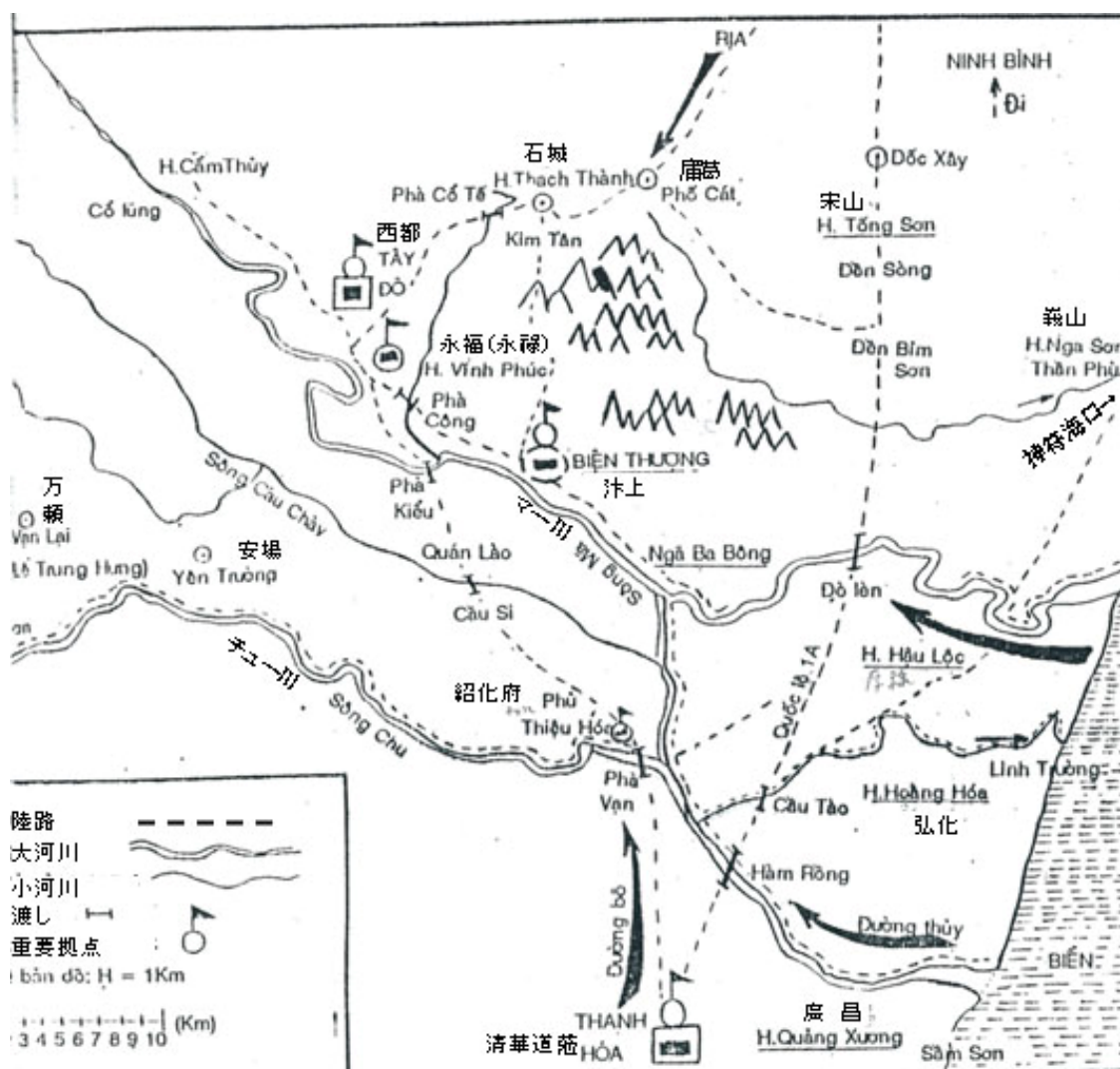
鄭検が帝に太師に封じられて内外軍政の全権を与えられて「先に斬って後で上奏する^{xii}」状況の時^{xiii}も同様だった。鄭検は「国を立てるにはまず根拠地を陰阻な場所に置かねばならない。万頼冊(紹化府)は山が直立し、川が曲がりくねるところで、まさに景勝の地である。帝王が起つ場所として天地が用意したようなところである。^{xiv}」と言った。鄭検はそこで濠を掘って土塁を築かせ、殿を立てて皇帝がここに遷って居するのを迎えた。

単に陰阻で景勝の地であるだけでは良い根拠地には不十分なのだ。だから鄭検以降その後継者たちもみな 65 年にわたる鄭一莫内戦の期間、沐上を根拠地として使い続けたのである。

そういうわけで、「土地ありき」ではなくて、鄭氏が正しい「土地」を探し出して確定し、この歴史段階において重要性を持つ根拠地にしたのでと、私は考える。

根拠地は鄭氏がタインホアの土地にしっかりと起って発展するのを助け、「扶黎滅莫」の事業を完遂するのに貢献し、中興黎朝時代の扉を開いた。

¹⁴ 『綱目』卷 13、平定王七年(1424)秋九月条。



【訳注】

- i これはベトナム語訳本の巻数と思われる。原史料の巻数は巻28である。
- ii 前期黎朝までは永寧縣 huyện Vĩnh Ninh、中興後は莊宗の諱を避けて永福縣 huyện Vĩnh Phúc、西山朝以降は永祿縣 huyện Vĩnh Lộc (『大南一統志』巻16、清化省上、建地沿革、永祿縣)
- iii 『同慶御覽地輿志』清化、永祿縣には汴上總が確認でき、八社村とあるが、東汴社、多筆社、汴下社、枚域社、本始社、玉山社、壽祿社のみ掲載されている。地図上には汴上社が確認できるので、これが脱落しているのだろう。
- iv 印度支那協会本には「永祿縣人」とあるのみである。史学院の訳本 (Phạm Trọng Diễm (dịch), Đào Duy Anh (hiệu đính), Nxb Thuận Hóa, 1996, tập 2, tr.313) には“Hoàng Đình Ái: người Biện Thượng huyện Vĩnh Lộc” とある。『大南一統志』の各種異本については、八尾隆生『大南一統志』写本データ』(平成13-14年度文部科学省科学研究費特定領域研究『東アジア出

版文化の研究』調整班B (No.13021230)、ベトナムの『地誌』の刊行について、研究成果報告書I)がある。また、同プロジェクトからは「『大南一統志』の編纂に関する考察」という報告書も出ているが、訳者未見。

v ゲーnghe は廟の一種。

vi 時間なのか距離なのかははっきり記されていない。

vii 以下の記述は『綱目』巻28、乙卯(順平)七年(1555)秋八月条の越訳に拠っているようである。

viii 以下の記述は『綱目』巻28、丁巳(順平)天祐元年(1557)秋七月条の越訳に拠っているようである。

ix 原文は Vũ Lăng Hải, Phạm Đắc Kỳ。Hải は Hải の誤り。

x 原文は người cầm long。対応する『綱目』の文は「把袖人」。袖(音は dù) はチュノムで傘・大傘の意味。陳荊和は『校合本 大越史記全書』の対応箇所において、「按「袖」疑是「袖」之誤。「把袖」當是侍者。」(p.854)と注している。

xi 「平吳大誥」中の一節。「靈山之食盡數旬、瑰縣之衆無一旅」

xii 原文は tiền trăm hậu tấu。「便宜裁決、然後奏聞」の事だろう。

xiii 1545年に阮淦が殺害されて鄭検が黎朝側の主将になったときのことである。

xiv 『綱目』巻27、丙午十四年(1546)八月条。